

## 一般口演

(6) 腰痛に対する腰部への鍼の刺入深度の違いによる治療効果の相違  
—ランダム化比較試験—○藤本 幸子<sup>1)</sup>, 井上 基浩<sup>2)</sup>, 中島 美和<sup>1)</sup>, 大橋 鈴世<sup>3)</sup>, 糸井 恵<sup>3)</sup>明治国際医療大学大学院鍼灸臨床医学<sup>1)</sup>, 明治国際医療大学 臨床鍼灸医学教室<sup>2)</sup>,  
明治国際医療大学 整形外科教室<sup>3)</sup>

## 要 旨

## 【目的】

腰痛に対する、より効果的な鍼治療方法の検索を目的に、同一部位における鍼の刺入深度の違いによる治療効果の相違を、ランダム化比較試験により検討した。

## 【方法】

対象：罹病期間が3カ月以上の腰痛を有する患者32名をコンピュータプログラム (Sample Size 2.0) を用いてランダムに、鍼を表在へのみ刺入する浅刺群と深部まで刺入する深刺群の2群に割り付けた。介入：施術部位は両群ともに腰部の自覚的最大痛み部位3～12ヵ所を選択した。浅刺群 (n = 16) は切皮のみ (約5mm), 深刺群 (n = 16) は20mm程度刺入し、両群とも1mm幅での雀啄術を20秒間行い、その後には抜鍼した。これらの治療を計4回 (1回/週) 行った。評価：初回治療前後、各回の治療前、治療終了4週経過後に痛みの Visual Analogue Scale (VAS) を記録し、併せて、初回治療前、治療終了時、治療終了4週経過後には Roland-Morris Disability Questionnaire (RDQ), Pain Disability Assessment Scale (PDAS) を用いて評価した。なお、評価は治療内容を知らない鍼灸師が行った。

## 【結果】

VAS, RDQ, PDAS の経時的変化パターンに関して両群間に交互作用を認め、深刺群で有意な改善を示した (VAS :  $p < 0.05$ , RDQ :  $p < 0.001$ , PDAS :  $p < 0.05$ )。また、初回治療直後、治療終了時、治療終了4週経過後の各時点においても、全ての評価項目において、深刺群は浅刺群と比較して良好な結果を示した (初回治療直後 ; VAS :  $p < 0.01$ , 治療終了時 ; VAS :  $p = 0.13$ , RDQ :  $p < 0.05$ , PDAS :  $p < 0.01$ , 治療終了4週経過後 ; VAS :  $p < 0.05$ , RDQ :  $p < 0.01$ , PDAS :  $p < 0.05$ )。

## 【考察】

全ての評価項目において、浅刺群と比較して深刺群では良好な結果を示した。このことから、腰痛に対する自覚的痛み部位への鍼治療は、筋の存在する深部まで刺入した方がより有効性が高いと考えた。効果の相違が出現した理由に関しては、浅刺群と深刺群それぞれの刺激を受容する組織の違いが関与し、局所における痛覚閾値や筋血流、あるいは筋交感神経活動に異なった影響を与えた可能性を考えた。